

氏名	落合 さより (藤田 さより) (学籍番号 08D015)		
学位の種類	博士 (リハビリテーション科学)		
学位記番号	第 22 号		
学位授与年月日	2016 年 3 月 8 日		
論文題目	精神科デイケアにおける就労支援のための作業体験プログラムの開発とその効果検証		
論文審査担当者	委員長	大城 昌平	教授
	委員	新宮 尚人	教授
	委員	宮前 珠子	教授
	委員	小田原 悦子	教授
	委員	藤本 栄子	教授

論文要旨

【研究目的】

本研究は、精神科デイケアにおける統合失調症者に対する就労関連技能の改善を図ることを目的とした「就労支援のための作業体験プログラム」を開発し、その有効性を検証することである。

【研究の対象と方法】

研究対象者：精神科デイケアを利用する、統合失調症者であり、且つ就労を希望する 60 歳以下の者で本研究に同意を得られた者とした。本研究の目的を達成するために、研究 I～III を実施した。

研究 I：文献検討より精神科デイケアを利用する統合失調症者に対する就労関連技能の改善に有効な試案版の「就労支援のための作業体験プログラム」を作成した。

研究 II：最終版のプログラムの完成に向けて、試案版のプログラムが、就労関連技能の回復に有効であるかを検証するための介入を行い、データ収集のために、介入前後に自己効力感、作業能力、職業準備性、自己の能力の現実検討を把握する各評価尺度による測定および半構成的グループインタビューを実施した。

研究 III：就労支援のための作業体験プログラムが、精神科デイケアを利用する統合失調症者に対し、就労に向けて、有効であるかを明らかにするための介入研究を実施し、データ収集のために介入前後に自己効力感、作業能力、職業準備性、職業興味、自己の能力の現実検討を把握する評価尺度による測定および半構成的インタビューを実施した。

【結果】

研究 I：先行文献を統合し、全 8 回で実施される試案版「就労支援のための作業体験プログラム」を作成した。包括的に様々な作業をプログラムに取り入れるために Macdonald の作業分類 (Macdonald, 1970) と、Holland の職業選択理論 (Holland, 1985) を理論根拠とした。また Yalom の集団の治療因

子 (Yalom, 1971) で述べられているように、集団での実施は「問題解決能力の改善」や「対人関係スキル」等の就労に重要な要素の能力向上に繋がることが期待できるとして、プログラムは集団で実施することとした。さらに Mosey の提唱した集団関係技能の発達の集団 (Mosey, 1986) を参照し、作業の実施方法を工夫した。また対象者により効果的に作業体験が実施できるよう作業分析の視点を用いたシートの作成や作業療法士の関わり方も具体的に設定した。

研究Ⅱ：精神科デイケアを利用する統合失調症者 4 名に対し、8 週間に亘り、試案版プログラムを実施した。プログラムの介入前後で有意に得点の上昇が見られた項目はなかったが、自己効力感、作業能力、職業準備性、自己の作業能力の現実検討の項目で、プログラムの介入後に素点の上昇が見られた。またプログラム終了後の半構成的インタビューにおいて、作業体験を重視したプログラムは、研究参加者に「よかった・楽しかった作業」、「難しく感じた作業」、「成功した時の感情」の 3 つのサブカテゴリーからなる【作業体験から感じたこと】のカテゴリーと、「グループで活動することのメリット」、「作業経験に基づく気づき」、「自己の作業能力に対する気づき」、「体験から感じた職業適性」、「プログラム自体の感想」5 つのサブカテゴリーからなる【作業体験からの気づき】のカテゴリーが抽出された。

研究Ⅲ：精神科デイケアを利用する統合失調症者 12 名に対し、最終版の「就労支援のための作業体験プログラム」を 8 週間に亘り実施した。職業準備性の社会生活・日常生活の下位項目において、プログラムの介入後に得点に有意な得点上昇がみられ、また職業興味の一貫性・職業興味の分化においても介入後において有意に得点上昇がみられた。さらに作業能力の研究参加者による主観的評価と客観的評価において、介入前においては、有意な差が認められたが、プログラムの介入後には、有意な差は認められず、主観的評価が客観的評価に近似する結果となった。プログラム介入前のインタビューの分析の結果においては、【働く事への不安】、【働きたい思い】、【期待する支援】の 3 つのカテゴリーが抽出された。毎回のプログラムの介入後のインタビューでは、「楽しく感じた作業・作業工程」、「難しく感じた作業・作業工程」、「失敗体験後の思い」「成功したときの感情」等の 6 つのサブカテゴリーからなる【作業体験から感じたこと】と、「失敗体験からの苦手な要素の気づき」、「問題対処方法の気づき」、「共同活動のメリット」、「自己認識とのズレ」、「体験から感じた職業適性」、「プログラムに参加することの効果」の 6 つのサブカテゴリーからなる【作業体験からの気づき】の 2 つのカテゴリーが抽出された。さらに終了後グループインタビュー内容について、テキストマイニング分析を行った結果、「できる」という単語が最も多く抽出された。

【結論】

今回、文献検討により作成した「精神科デイケアにおける就労支援のための作業体験プログラム」には、統合失調症者の就労関連技能である自己効力感、作業能力、職業準備性、職業興味の獲得、適切な自己評価の向上に有効であり、今後、精神科デイケアにおける新たな就労支援プログラムとしての活用が期待できる。

論文審査の結果の要旨

本研究は、精神科デイケアにおける統合失調症者に対する就労関連技能の改善を図ることを目的とした「就労支援のための作業体験プログラム」を開発し、その有効性を検証することである。

研究Ⅰでは、文献検討より精神科デイケアを利用する統合失調症者に対する就労関連技能の改善に有効な「就労支援のための作業体験プログラム（試案版）」を作成し、研究Ⅱでは、試案版のプログラムが、就労関連技能の回復に有効であるかを検証するための介入を行い、最終版のプログラムを完成させた。そして研究Ⅲにおいて、「就労支援のための作業体験プログラム」が、就労に向けての準備性を高めるのに有効であるかを検討した。

本研究論文の審査においては、今回の作業体験プログラムの新規性と独創性について審議され、それらは、従来の就労支援プログラムに作業体験を含めることで、対象も自身の経験に基づく気づきを促した点にあることが認められた。さらに、本プログラムの効果は内容構成そのものだけでなく、作業療法士の介入姿勢が重要であるという点も確認された。

上記の結果より、本博士論文は、就労支援の準備性を高める新たな手段として臨床的意義が高く、今後、更なる検討によっては多くの精神科関連施設にて応用されることが期待できる。

以上を統合すると、落合さより（藤田さより）氏の論文は、今後の臨床活用への期待と共に、作業活動を治療・介入手段として関わる作業療法の意義と効果を示す一助になると考えられ、精神科作業療法のさらなる発展にも期待がもてると評価出来る。よって本審査委員会は、本論文が著者 落合さより（藤田さより）氏に博士（リハビリテーション科学）の学位を授与することに十分な価値あるものと認めた。